



金 私が専門領域を決めたのは、大学整形外科にリウマチが専門の鳥巢岳彦先生(当時助教授。後に教授)がおられた頃になります。別府には九州大学温泉治療学研究所(現在は生体防御医学研究所) 附属病院があり、そこに内科の延永教授というリウマチ治療では日本で有名な先生がいらっしやう。そこへ学生のと看に行かされたのがきっかけで、リウマチの勉強を始めました。

中島 私が学生時代の九州大学整形外科は杉岡洋一先生が教授を務めていました。私の父親ぐらいの年齢で、非常に魅力的な方でした。杉岡先生は股関節が専門で、たくさん患者さんが九州大学に集まっておられましたので、よく研修医として担当しました。整形外科は、よく「機能の外科」といわれます。股関節の患者

さんを通して、痛い、歩けないといった症状を改善し、機能を回復させる点に魅力を感じました。また、義母が関節リウマチを患っていましたので、もう1つの専門領域にさせていただきました。

中島 関節リウマチの概要を説明していただけますか。

金 リウマチの症状は、まず手から出ることが多いです。最初は「指の腫れが2〜3週間引かない」「朝起きたら手指にこわばりがあった」といった症状が一番多い。ただ、この時点ではリウマチかどうかは確定できません。血液検査、レントゲン撮影、超音波検査を実施します。腫れているところに超音波をあけると、滑膜炎の有無がわかります。リウマチが滑膜にとどまっているうちに治療を始めることができれば軟骨や骨

が壊れるのを防ぐことができます。

中島 治療は薬物療法が中心ですね。ここ数十年で薬物療法が大きく進歩しました。特に生物学的製剤の登場が大きい。滑膜組織中にある炎症性サイトカインをブロックすれば、リウマチの進行を抑制できることがわかりました。サイトカインをブロックする薬を点滴・注射で投与する治療法が普及。さらに14〜15年前、炎症を抑える生物学的製剤が開発され、関節が壊れる人が少なくなりました。とにかく早く専門医に診てもらい、早く炎症を取る。関節の腫れやこわばりを感じたり、痛みがあつたりしたときは躊躇なく医療機関を受診しましょう。

中島 生物学的製剤では自己注射(自己注)で対応できるものも多いですね。

金 糖尿病の患者さんがインスリンを打つように、自己注射で投与でき

良き師との出会いが
専門領域決定の決め手に



紀尾井町メディカルクリニック
院長 **金 強中**



九州大学医学部整形外科教室
教授 **中島 康晴**

「人生100年時代」へ——
**整形外科のできること
整形外科の
しなければいけないこと**



「人生100年時代」の大きなテーマは健康寿命を、いかに延ばすか。高齢になればなるほど、さまざまな疾患とのつきあい方が重要になる。整形外科を代表する2人の権威に治療の最前線、学会の役割などを語っていただいた。

文 / 岡林秀明